

中国人日本語学習者のメタファー表現理解に影響する要因：母語とメタファー基盤に関わる知識を中心に

鐘, 勇
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/27300>

出版情報：比較社会文化研究. 34, pp.1-14, 2013-09-09. 九州大学大学院比較社会文化研究科
バージョン：
権利関係：

中国人日本語学習者のメタファー表現理解に影響する要因

—母語とメタファー基盤に関わる知識を中心に—

ショウ
鐘

ユウ
勇

1. はじめに

概念メタファー理論 (Conceptual Metaphor Theory) と応用認知言語学 (Applied Cognitive Linguistics)¹ の発展にしたがって、外国語学習者のメタフォリカル・コンピテンス (Metaphorical Competence、以降MC) の重要性が高まってきた。今のところ、英語教育などではMC研究がかなり進んでいる。にもかかわらず、日中両国の日本語教育では、学習者のMCの発達や養成についてまだあまり考察されていない。そこで本研究では、中国の日本語教育におけるMC研究、ひいては応用認知言語学研究を推進したい。具体的には、MCの重要な構成要素としてのメタファー表現理解力に注目し、中国人日本語学習者のメタファー表現理解力の養成に資する目的で、母語とメタファー基盤に関わる概念・言語の知識、認知様式の知識及び文化知識の要素と日本語メタファー表現の理解との関連性について解明したい。

2. 先行研究

2. 1 メタファー、認知と文化

Lakoff & Johnson (1980) は「メタファーの本質は、ある事柄を他の事柄を通して理解し、経験することである」² と解釈し、メタファーを一種の認知様式だとみなし、概念メタファー理論を提唱している。それによると、人間の概念体系は根本的にメタファーによって構造を与えられ、規定されている。また、概念体系の中に概念レベルのメタファーが存在しているからこそ、言語レベルのメタファー表現が可能である。例えば、我々の概念体系には次のようなメタファーが存在していると考えられる。

《重要は中心、非重要は周辺》³

- a. 組織の中核
- b. 中心的な存在
- c. 周辺のな問題
- d. 言葉の端をとらえる

上掲の《重要は中心、非重要は周辺》は概念レベルのメタファーで、その意味は「『中心』や『周辺』の概念を通して『重要』や『非重要』の概念を理解・経験する」であり、メタファーの下に示しているa～dの表現は、そのメタファーの存在を裏付けている具体的なメタファー表現例である。a～dからは、我々は概念レベルにおいて重要性の中心・周辺の空間位置とみなし、中心・周辺の空間領域に関する具体的な概念に基づいて重要性という抽象的な領域の概念をメタファー的に把握している、ということを知ることができる。その後、Lakoff (1987)、Johnson (1987)、Lakoff (1993) 及びLakoff & Johnson (1999) では、概念メタファー理論の発展として、メタファーを「起点領域 (source domain) から目標領域 (target domain) への写像」だと捉えるメタファー写像 (metaphorical mapping) の理論が提案され、精緻化されてきた。例えば、上記の《重要は中心、非重要は周辺》のメタファーにおいては、「中心・周辺」の空間位置に関する概念は起点領域で、「重要性」の概念は目標領域である。起点領域に関わるさまざまな知識は目標領域に写像され、目標領域に対する理解を促進する。

概念メタファー理論では、離れた2つの領域の写像がなぜ存在するかというメタファーの基盤 (動機づけ) が重要だとされている。Lakoff & Johnson (1980) 以後は、主に共起性基盤、即ち起点領域と目標領域が共起する状態を体験することが議論されてきているが、鍋島 (2011) はその他に、同じく身体的経験に根ざしている構造的基盤と評価性基盤も存在すると主張している⁴。構造的基盤とは、イメージ・スキーマ、または形状が基盤となることを指す。例えば、《群衆は水 (表現例: 「人海戦術」、「人波」)》は起点領域と目標領域が「連続体」のスキーマを共有する構造的基盤のメタファーだと考えられる (鍋島 2011: 105)。また、いい感じや嫌な感じ、大きい感じや小さい感じという通常の辞書の意味とは異なる情緒・感覚的な意味に含まれる好ましい評価性や否定的な評価性が基盤となるものが評価性基盤のメタファーである。例えば、《善は白、悪は黒 (表現例: 「黒い霧」、「身の潔白」)》のメタファーでは、起点領域としての「白」、「黒」

は本来評価性を含んでいる(鍋島 2011: 110)。実際には、構造的基盤のメタファーも評価性基盤のメタファーもある種の類似性(客観的類似性または主観的類似性)に基づいていると考えられる。したがって、本質的には、共起性基盤は換喩に基づくのに対し、構造的基盤と評価性基盤は隠喩に基づく⁵。

また一方で、概念メタファーは文化と切っても切れない関係にある。Kövecses (2005)は文化という概念を「小さい集団または大きい集団に属する人々を特徴付ける一組の共通認識」⁶と捉え、概念メタファーと文化の繋がりについて詳細に考察した⁷。それによれば、概念メタファーと文化は主に次の6点において密接に関連している。第一に、世界に対する我々の共通認識の中には具体的な物事の認識のみならず抽象的な物事の認識もあり、抽象的な物事(議論、恋愛など)の認識においてはよく概念メタファー(《議論は戦争(表現例:「議論の弱点を突く」)》、《恋愛は旅(表現例:「結婚に至った」)》などに反映されているメタファー的な思考が大きな役割を果たしている。第二に、概念メタファーは多くの場合、文化の重要な部分である言語によって表出されている。言語は概念メタファーの主な標識だと言える。第三に、概念メタファーは一般に、ある特定の文化において、強い物理的な存在様式を持ち、風習、行動、象徴、人工物などの社会文化的な実践を通して表出されることがある。例えば、アメリカ文化におけるフォーマルな会議の席順については、普通重要な人はそれほど重要でない人より、中心的で高い位置に座る傾向が見られる。このような傾向は、《重要は中心、非重要は周辺》と《重要は上、非重要は下》のメタファーにおけるメタファー的な構造に基づいていると考えられる。第四に、概念メタファーはメタファー表現の形で談話の中で使われる際に、社会文化的な談話機能を果たすことがある。例えば、Charteris-Black (2003)は、「口」、「舌」、「唇」という3つの概念が英語とマレー語においてどのように、また、どのような原因で比喩的(メタファー的・メトニミー的)に使われているかについて調査した。その結果、英語とマレー語には、同様の概念メタファー(《様式は味》など)に基づいた“honey-tongued(直訳:舌が蜜のように甘い)”や“lidah manis(直訳:舌が甘い)”などのメタファー表現が存在し、また、これらのメタファー表現はいずれの言語においても、人が話したことを評価する(特に、ネガティブ評価を下す)談話機能を持っていることが解明された。第五に、ある文化の慣習的なメタファーによって構築されたシステムは、その文化の安定性を保っている。なぜならば、文化の一部は世界に対するメタファー的な共通認識からなり、また、慣習的なメタファー表現やメタファー

的に構築された物理的現実はある程度の時間的安定性があるためである。最後に、文化は一組の共通認識だとみなすことができるため、メタファー的な思考などにおける創造性は、文化に変化や新しい体験の機会をもたらす可能性が存在する⁸。

2. 2 MCの定義と重要性

MCの定義については、これまで多くの議論があった(Danesi 1992, Littlemore 2001a, Azuma 2005, 東 2006, Hashemian & Nezhad 2006, 王・李 2004, 鐘・井上 2012など)。研究者により多少異なるが、多くの定義はメタファー表現の識別力、理解力及び産出力に焦点を当てている。本研究では、MCの定義は鐘・井上(2012)に従う。即ち、「MCとは、様々な概念メタファーに基づいたメタファー表現を識別・理解・産出する能力である。」

MCの重要性については、Low (1988)が最初に論じた。同氏によれば、メタファーは様々な言語活動と言語使用に寄与でき、外国語教育で重要視されるべきである。その後、Danesi (1992, 1995)、Danesi & Mollica (1998)及びKecskes & Papp (2000a)は、メタファー的にディスコースをプログラムするのは母語話者の基本的な特徴であるため、MCは母語話者と同様の流暢度で目標言語を話せるようになる点でキープポイントである、と指摘している。Littlemore (2001b)では、MCは外国語習得の成功に貢献でき、コミュニケーション能力の発達やコミュニケーション・ストラテジーの使用において、重要な役割を果たしていると主張している。胡(2004: 131)は、「メタファー表現の出現と使用は自然言語によく見られる現象であり、MC養成は既に外国語教育において欠かせない一環となってきた」⁹と指摘している。王・李(2004)は、メタファーは我々の言語を豊富にするのみならず、創造的な思考や外国語習得とも密接な関係にあり、外国語教育においては、言語能力とコミュニケーション能力と並行しMCの養成も教育の重点として取り扱うべきである、と述べている。更に、Azuma (2005)によれば、比喩は言語体系の背後にある我々の概念体系の構造や機能を知る機会を学習者に提供し、目標言語の理解だけでなく人間の心、身体と言語の関係に対する理解も促進することができるという。Littlemore & Low (2006)によると、MCは外国語学習者の文法能力、談話能力、発語内的能力、社会言語学的能力、ストラテジー能力、即ちコミュニケーション能力全般に貢献でき、第二言語習得の初級から上級までの言語習得、指導法及びテストに深く関わっている。最後に、張(2011)は、MCの養成は単語のメタファー的な意味やディスコースに対する理解及び文化の習得を促進することがで

き、学習者の総合的な言語運用能力を向上させるのに寄与できる、と主張している。このように、MCは外国語習得に関する様々な面に寄与でき、学習者のMC養成はもはや言語能力やコミュニケーション能力と同じく、外国語教育における重要な要素となった。

2. 3 外国語学習者のメタファー表現理解に影響する要因

これまでのMC研究によると、外国語学習者は殆どメタファー表現の理解力や運用力が不足している (Danesi 1992, Russo 1997, Kecskes & Papp 2000b, Hashemian & Nezhad 2006, 游 2009, 鐘 2012a, 2012bなど)。今後、学習者のメタファー表現の理解力と運用力の養成が重要な課題となる。メタファー表現理解力の養成を考慮する際に、メタファー表現の理解に影響する要因を明らかにすることが重要ではないかと考えられる。

まだ多くはないが、現在では、Azuma (2009, 2011) により比喩表現 (メタファー表現とメトニミー表現) の理解における母語知識の影響が解明されつつある。具体的には、彼女はまず40の比喩表現を利用して調査のためのメタファー認知テスト (Metaphor-Cognition Test) を作成した。テストの中の表現は、日英両言語間で概念基盤や言語表現が共有かどうかに基づいて次のようなグループに分けられている。①日英両言語間で概念基盤を共有し言語表現も類似する表現 (“Time is money.” など)、②英語概念基盤の表現 (“to kick the bucket” など)、③日本語概念基盤の表現 (“You and I are united with a red thread.” など)、④日英両言語間で言語表現が概念が異なる表現 (“to come to a head” など)。次に、日本人英語学習者と英語母語話者を対象にメタファー認知テストを行うとともに、一部の被験者に面接調査を実施した。最後に、集めたデータをもとに比喩表現の理解への母語知識の影響について詳しく分析した。結果としては、①概念基盤・言語表現ともに共有の項目は正答率が高いこと、②理解されにくい表現は文化依存かつ普遍性のないものであるのに対し、相対的に理解されやすい表現は普遍的なものであること、③日本人英語学習者は日本語母語知識の、英語母語話者は英語母語知識の影響が特に顕著であること、④イメージのはっきりした表現は正答率が高いこと、ただし、母語知識の影響が見られること、⑤全ての項目の理解に母語知識の利用が見られ、母語知識・スキーマが活性化されているが、これらには功罪両面があることなどが明らかになった。

以上のように、母語知識はメタファー表現とメトニミー表現の理解に大きな影響を及ぼしている。外国語学習者の比喩表現理解力、ひいては総合的なMCや比喩能力の養成にあたっては、母語知識の影響も考慮に入れな

ければならないと思われる。

3. 研究課題

先行研究から分かるように、概念メタファー理論ではメタファーの基盤が重要視されており、概念メタファーの形成にはメタファーの基盤が非常に重要な役割を担っている。したがって、概念メタファーやそれによるメタファー表現の理解にあたっては、メタファー基盤に関わる認知様式の知識や文化知識などが何らかの影響をもたらしてくるのではないかと考えられる。また、Azuma (2009, 2011) によれば、母語に基づく概念的知識、言語知識や文化知識などは英語学習者の比喩表現の理解に大きな影響を与え、学習者のMC発達において軽視できない役割を果たしていることが示唆されている。そこで本研究では、中国人日本語学習者のメタファー表現理解力の養成に資する目的で、母語とメタファー基盤に関わる概念・言語の知識、認知様式の知識及び文化知識の要素と日本語メタファー表現の理解との関連性について考察する。具体的には、次の3つの課題を明らかにしたい。

- ① 母語とメタファー基盤に関わる概念・言語の知識、認知様式の知識や文化知識の要素と日本語メタファー表現の理解はどのように関連しているのか。
- ② 日本語メタファー表現の理解における各要素の影響力はどのようになっているのか。
- ③ 中国人日本語学習者にとって、理解が容易な日本語メタファー表現と理解が困難な日本語メタファー表現はそれぞれどのようなものか。

4. 研究方法

前節で挙げた課題を解明するため、筆者は日本語メタファー表現を収集して独自のメタファー表現理解テストを作り、中国人日本語学習者を調査対象としてそれを実施し、調査結果について分析した。

4. 1 メタファー表現理解テストの作成

メタファー表現理解テストを作成するにあたっては、まず、鐘 (2012b) で用いたメタファー表現の一部を再利用したり、メタファーに関する著書や学術論文¹⁰、及び辞典¹¹やGoogleを活かしたりし、メタファー基盤に関わる認知様式の特徴に基づく3種類の概念基盤のメタファー (1. 共起性基盤のメタファー、2. 構造的基盤のメタファー、3. 評価性基盤のメタファー) による134のメタファー表現を集めた。次に、日中両言語間で

概念メタファーとメタファー表現が共有するかどうかという概念・言語の特徴により、それぞれグループ1、2、3のメタファーから以下に示しているグループa、b、cに属する表現を4つずつ取り出し、計36のメタファー表現を選び出した。

- ① グループa：中国語にも類似の概念メタファーとメタファー表現がある表現（概念的・言語的に共有）。例えば、「彼とはもう連絡を断った」という表現が挙げられる。この表現は中国語訳の「和他已经断了联系」と同じく《関連性は連結》というメタファーに基づいたものであり、両者の全体的な言語構造もほぼ同様である。
- ② グループb：中国語には類似の概念メタファーがあるが、類似のメタファー表現がない表現（概念的にのみ共有）。例えば、「さっき言ったことを悪く取らないでください」という表現に関しては、中国語には「请不要把我刚才所说的话往坏的方面取」という同じ表現はないが、《理解はつかむこと》というメタファーは存在し、また、それに基づいた「没抓住重点（要点をつかんでいない）」などの中国語メタファー表現も少なくない。
- ③ グループc：中国語には類似の概念メタファーも類似のメタファー表現もない表現（概念的・言語的に非共有）。例えば、日本語には《人生は野球試合》というメタファー及びそれによる「私は何事にも直球勝負です」、「研究に全力投球で取り組む」などのメタファー表現が存在しているが、中国語には《人生は野球試合》というメタファー及びそれによる表現がない。

選択の際には、日中両言語間で概念メタファーとメタファー表現が共有しているかどうかをはっきりしない表現を選ばないようにした。また、選出した一部のメタファー表現の比較的難しい単語を、比較的理解されやすいものに直したりした。例えば、「2人の仲が近づいている」という表現を「2人の関係が近づいている」のよう

にした。他には、文脈を付け加えたり表現を短くしたりするような修正も行った。例えば、「上からの命令」を「これは上からの命令だ」のようにし、「娘がかたづかなくて困っています」を「娘が去年片付いた」のように修正した。最終的に得られた36のメタファー表現の内訳は付録1のとおりである。これらの表現をテスト項目の作成に用い、日本語メタファー表現を中国語に訳す翻訳問題からなるメタファー表現理解テスト（付録2）を作った。

4. 2 テストの実施と処理

2012年9月に、中国の华中科技大学と湖北第二师范学院の日本語学科の2クラスの学生を調査対象としてメタファー表現理解テストを実施し、有効な試験用紙を72部回収した。調査対象者の内訳は表1のとおりである。その後、回収した試験用紙に1から72まで連続した番号を付け、各テスト項目の正誤性について判定した。判定しにくい解答の場合は、もう一人の中国人上級日本語学習者に協力してもらったが、その他の解答は主に筆者が判定を行った。また、正誤判定の際に、母語とメタファー基盤に関する知識の影響を重点的に調べるため、テスト項目のメタファー的な部分が正しく翻訳されていれば、他の箇所の語彙や文法の翻訳がやや間違っていたとしても、正答だと認めた。例えば、「何かうまいことがありますか」を「没有什么高兴的事（楽しいことはありません）¹²⁾」に、「二人の関係が近づいている」を「他们俩的关系密切（彼ら二人の関係が親しい）」と訳していても、正答とした。ただし、より妥当な結果を得るため、テスト項目の分析にあたってやや古い表現である項目10「胸が煮える」を不適切なものとしてテストから外した。それゆえ、最終的に分析したのは35のテスト項目であった。そのうち、グループ1、2、3に属する項目数はそれぞれ11、12、12であり、グループa、b、cに属する項目数はそれぞれ12、12、11である。各テスト項目の正誤性について分析したあと、統計処理ソフトSPSS19を用いて記述統計や二項ロジスティック回帰分析などの統計処理を行った。

表1 調査対象者の内訳

	学年	人数	年齢	男女比
調査対象者	学部3年	72名	18～22歳	12：60

4. 3 分析方法

分析方法としては、まず統計処理の結果に基づいて母語に基づく概念・言語の知識と日本語メタファー表現の理解、及びメタファー基盤に関わる認知様式の知識と日

本語メタファー表現の理解の関連性について調べた。次に、文化知識の側面からのメタファー表現理解への影響について検討した。最後に、いくつかの示唆に富むテスト項目の解答状況に関して質的な分析を行った。

5. 結果と考察

5. 1 母語に基づく概念・言語の知識と

メタファー表現理解の関連性

概念・言語の特徴をもとに出来上がった、グループ a、

b、cのメタファー表現の正答率における記述統計の結果は次の通りである。

表2 グループa、b、cの正答率における記述統計の結果

		度数	平均値	標準偏差
概念・言語	a：概念的・言語的に共有	72	91.93%	11.240%
	b：概念的にのみ共有	72	39.64%	18.468%
	c：概念的・言語的に非共有	72	49.49%	18.910%

まず、平均値から見れば、グループaの平均正答率は90%以上にも上り、グループb、cの平均正答率を大きく上回り、メタファー表現の理解においては母語知識という要素が重要な役割を担っていることが示されている。それと同時に、日中両言語間で概念的・言語的に共有のメタファー表現は比較的理解されやすいのに対し、言語的に非共有のメタファー表現は比較的理解されにくいことが分かる。次に、グループaとグループbを比べれば、両方とも概念的に中国語と共有するが、前者は後者より平均正答率が約50%も高く、メタファー表現の理解にあたっては、母語に関わる言語的な知識がもっとも活用されていることを窺うことができる。また、グループbとグループcを比較すれば、前者は中国語と概念的に共有するにもかかわらず後者より平均正答率が低かったことから、言語的に非共有の日本語メタファー表現を理解する際に、母語に基づく概念メタファーの知識があまり役に立たないということが示唆される。ただし、目標言語のメタファー表現の理解において母語に関わる概念メタファーの知識がはたして働くのか、どのように働くのかに関しては、ここでは断言することができず、今後の更なる考察が必要だと考えられる。また、理論的には、母語に基づく概念メタファーの知識が働くのであればグループbの平均正答率がグループcより高くなるべきであり、また、母語に基づく概念メタファーの

知識がまったく役立たないとしてもグループbとグループcの平均正答率が近くなるべきであるが、今回のテストではグループbの平均正答率がグループcより約10%低かったというやや意外な結果が出た。この結果によると、テスト項目の作成に用いたメタファー表現の文脈の長短や語の難易度に関する統制が十分ではないため、全体的にグループbの表現がグループcより理解されにくい可能性が示唆される。今後、メタファー表現の文脈の長短や語の難易度からのメタファー表現理解への影響について詳しく考察することが望まれる。最後に、グループa、b、cの正答率の変動係数を計算したところ、それぞれ12.2%、46.6%、38.2%であった。この結果からは、グループaの正答率に比べグループb、cの正答率が比較的ばらつきが大きく、日中両言語間で概念的・言語的に共有のメタファー表現の理解に比べ、概念的にのみ共有のメタファー表現と概念的・言語的に非共有のメタファー表現の理解における個人差が比較的大きいことが分かる。

5. 2 メタファー基盤に関わる認知様式の知識とメタファー表現理解の関連性

認知様式の特徴によって作られた、グループ1、2、3のメタファー表現の正答率における記述統計の結果は表3に示している。

表3 グループ1、2、3の正答率における記述統計の結果

		度数	平均値	標準偏差
認知様式	1：共起性基盤	72	69.75%	15.792%
	2：構造的基盤	72	54.69%	15.972%
	3：評価性基盤	72	58.43%	16.067%

まず、平均値のところから見ると、グループ2とグループ3の平均正答率にはほぼ差がなかったものの、グループ1の平均正答率はグループ2と3より約10%高かった。

この結果によれば、共起性基盤のメタファーに基づくメタファー表現は比較的理解されやすいのに対し、構造的基盤と評価性基盤のメタファーに基づくメタファー表現

の理解は比較的難しい、ということが分かる。その根底にある原因については、人間は皆類似する身体構造や認知システムを持っているがゆえに、身体的経験に直接根差している共起性基盤のメタファーによる表現は、自然に構造化性基盤と評価性基盤のメタファーによる表現よりも理解されやすいのではないかと考えられる。次に、グループ1、2、3の正答率の変動係数を求めたところ、それぞれ22.6%、29.2%、27.5%であった。したがって、グループ1、2、3の正答率のばらつきにはほとんど違いがなく、共起性基盤のメタファーによるメタファー表現、構造化性基盤のメタファーによるメタファー表現、及び評価性基盤のメタファーによるメタファー表現の三者の理解における個人差の程度は類似していることが分かる。

5.3 概念・言語と認知様式の知識の影響力

本節では、母語に基づく概念・言語の知識とメタファー基盤に関わる認知様式の知識がメタファー表現の理解にどの程度影響するかについて調べていく。

表4 概念・言語の知識と認知様式の影響力

	B	標準誤差	Wald	自由度	有意確率	Exp (B)
概念・言語 (1)	2.677	.135	393.565	1	.000	14.537
認知様式 (1)	.633	.102	38.808	1	.000	1.882
定数	-.424	.059	51.286	1	.000	.655

モデル χ^2 検定: $p < .01$; ホスマー・レメシヨウ検定: $p = .316$; 判別の中率: 70.6%

表4を見て分かるように、モデル全体は有意で(モデル χ^2 検定で $p < .01$)、「概念・言語 (1)」と「認知様式 (1)」の両方が有意な独立変数として選択された ($p < .01$)。即ち、両変数ともメタファー表現の理解に影響を与える有効な要因だと考えられる。また、ホスマー・レメシヨウ検定結果は $p > .05$ で、判別の中率は70.6%であり、モデルがほぼ適合し、一定の説明力を持つことが示されている。更に、「概念・言語 (1)」と「認知様式 (1)」のオッズ比はそれぞれ14.537と1.882であったことから、両方ともメタファー表現の理解に正の影響を与えるが、「概念・言語 (1)」のオッズ比は「認知様式 (1)」より1からの距離が遠いため、前者は後者より影響力が強いことが明らかになった。換言すれば、日本語メタファー表現の理解にあたっては、その背後の概念メタファーの基盤が換喩に基づくか隠喩に基づくかということより、その表現が日中両言語間で概念的・言語的に共有するののかということのほうが影響力が大きい、ということである。なぜ概念・言語という変数がメタファー表現の理解に大きな影響力を持つかについては、前の5.1節でも少し触れた

まず、表2と表3に示されているように、他のグループに比べ、グループbとc及びグループ2と3はそれぞれ平均正答率が近いと、2グループをそれぞれ統合させ、元の3項尺度を2項尺度に修正した。具体的には、概念・言語の特徴については、「概念的・言語的に共有」のグループを保持し、「概念的にのみ共有」と「概念的・言語的に非共有」を「言語的に非共有」というグループにまとめた。認知様式の特徴については、2.1節で論述したように、本質的に共起性基盤は換喩に基づき、構造化性基盤と評価性基盤は隠喩に基づくがゆえに、「共起性基盤」を「換喩」のグループに変更し、「構造化性基盤」と「評価性基盤」を「隠喩」というグループに統合させた。

その後、メタファー表現の理解に対し、概念・言語と認知様式の2要素がどれぐらいの影響を持つのかを知るために、「正答」と「誤答」、「概念的・言語的に共有」と「言語的に非共有」、及び「換喩」と「隠喩」のグループにそれぞれ1と0を割り当て、統計処理ソフトSPSS19で尤度比検定による変数増加法を用いた二項ロジスティック回帰分析を適用した。結果は次のとおりである。

ように、母語に関わる言語的な知識が大いに活用されていることが最大の原因ではないかと考えられる。日本語と中国語は多くの漢字や単語を共有しており、その上表現の言語構造も類似するのであれば、当然のことながら理解しやすい。例えば、「概念的・言語的に共有」のグループの表現としてのテスト項目3「二人の関係が近づいている」とテスト項目5「彼とはもう連絡を断った」の場合、全体的な言語構造がそれぞれ中国語訳(「两人的关系越来越近」、「和他已经断了联系)と類似しているうえに、メタファー的な意味に密接に関わっている「関係」、「近」、「連絡」、「断」などの漢字や単語も日中両言語間で共有するものである。それゆえ、「二人の関係が近づいている」と「彼とはもう連絡を断った」の2表現は、中国人日本語学習者にとって非常に理解されやすいものであろうという予測がつく。実際に、今回のメタファー表現理解テストにおいてこの2表現はそれぞれ97%と99%といふかなり高い正答率となっている。これに対し、「言語的に非共有」のグループに属する日本語メタファー表現の理解については、その中の一部の漢字や単語は日中両

言語間で共有されているが、全体的な言語構造が異なるため、母語に基づく言語知識の活用が一段と困難になり正答率も大幅に下がってしまう。このように、母語の言語知識の活用度によって概念・言語という変数がメタファー表現の理解に多大な影響を与えている。

5. 4 文化知識の側面からの影響

2.1節で見たように、概念メタファーは様々な面において共通認識としての文化と切っても切れない関係にある。例えば、抽象的な物事（議論、恋愛など）に対する我々の認識においては、よく概念メタファー（《議論は戦争》、《恋愛は旅》など）に反映されているメタファー的な思考が重要な役割を担っている。以下では、慣習的な概念メタファーに反映されている、ある抽象的な概念に

対する共通認識は日中両言語間で同様かどうかにより、概念・言語の特徴に基づくグループc（概念的・言語的に非共有）の表現、即ち日本語独特の概念メタファー（抽象的な概念に対する日本人独特の共通認識）に基づいたメタファー表現を用いて「①濃文化性（中国人日本語学習者にとって比較的文化性が濃い）」というグループを立てるとともに、残りの表現を「②薄文化性（中国人日本語学習者にとって比較的文化性が薄い）」というグループに入れ¹³、文化知識という側面とメタファー表現理解の関連性について検討してみる。

グループ①とグループ②のメタファー表現における被験者の正答率をもとに記述統計を行ったところ、次の表5のような結果が得られた。

表5 グループ①、②の正答率における記述統計の結果

		度数	平均値	標準偏差
文化	① 濃文化性	72	49.49%	18.910%
	② 薄文化性	72	65.76%	12.547%

一見して分かるように、グループ②はグループ①より平均正答率が約15%高かった。この結果によると、文化性が薄いメタファー表現は比較的理解されやすいのに対し、文化性が濃いメタファー表現は比較的理解されにくいことが示されている。また、メタファー表現理解に対

する文化知識の影響力について調査するため、「正答」と「誤答」、「薄文化性」と「濃文化性」のグループにそれぞれ1と0を割り当て、強制投入法を用いた二項ロジスティック回帰分析を行った。結果は次のとおりである。

表6 文化知識の影響力

	B	標準誤差	Wald	自由度	有意確率	Exp (B)
文化 (1)	.672	.087	59.253	1	.000	1.958
定数	-.020	.071	.081	1	.776	.980

モデル χ^2 検定: $p < .01$; 判別の中率: 61.0%

モデル全体は有意で（モデル χ^2 検定で $p < .01$ ）、「文化 (1)」も有意な変数として選択され（ $p < .01$ ）、判別の中率は61.0%であった。次に、オッズ比は1.958であったことから、概念・言語の知識ほどではないが、文化知識もメタファー表現の理解に正の影響があることが示されている。

ただし、5.1節と5.3節で見たように、概念・言語の特徴に基づくグループa（概念的・言語的に共有）の平均正答率はグループb（概念的にのみ共有）とグループc（概念的・言語的に非共有）より圧倒的に高く、概念・言語の知識が日本語メタファー表現の理解に大きな影響力を持っている。グループaとbからなるグループ②（薄文化性）がグループcからなるグループ①（濃文化性）より平均正答率が高いのは、文化知識の影響を受けたから

か、それとも、グループaの極めて高い平均正答率、即ち概念・言語の要素に影響されたからか、あまりはっきりしない。そのため、上記の表5と表6の分析によって得られた、文化性の薄いメタファー表現に比べ文化性の濃いメタファー表現のほうが比較的理解されにくい、文化知識もメタファー表現の理解に一定の影響力があるという結果は、決まった結論ではなく今後の更なる検討と研究が必要である示唆にとどめるのが妥当ではないかと考えられる。

5. 5 質的分析及びその示唆

前節までは、主に量的分析により母語とメタファー基盤に関わる概念・言語の知識、認知様式の知識及び文化知識と日本語メタファー表現の理解との関連性について

見てきた。本節では、メタファー表現理解テストにおける、特に示唆に富む解答が出たいくつかのテスト項目について質的な分析を行ってみる。

まず、項目12「それは下書きだ」と項目34「彼は絶対黒だ」の解答状況について見ていく。前者の場合は、「那是劣作(それは下作だ)」、「书法很烂(書道は下手糞だ)」、「这写得不好(これはよく書かれなかった)」、「这是下策(これは下策だ)」などに代表される誤答例が39も出た。また、後者の場合は、「他绝对是错的(彼は絶対間違っている)」、「他这个人很坏(彼はとても意地悪い)」、「他绝对是卑鄙小人(彼は絶対卑劣な小人物だ)」などのような誤答例が合計43にも上った。これらの誤答からは、解答にあたって、被験者の概念体系の中で《悪いことは下》と《悪いことは黒》という2つのメタファーが活発に働いていたことが分かる。最終的には正解に至らなかったが、やはり母語に基づく概念メタファーの知識はメタファー表現の理解において大きな役割を果たしていることを示しており、理解においてそれが生かされることが望まれる。しかし、5.1節の分析結果によれば、従来の指導法による授業を受けている日本語学習者の場合は、母語の概念メタファーの知識はあまり功を奏さないため、母語に基づく概念メタファーの知識を学習者に活用させるには、教師による適切な指導が必要であるということになる。

次に、項目17「議論の弱点を突く」と項目27「美味しい仕事が欲しい」の解答について分析する。項目17の場合は、「突出议论的不足(議論の不足点を突出させる)」、「议论的弱点突出(議論の弱点が突出している)」、「从议论的弱点处突破(議論の弱点から突破する)」、「突破议论的弱点(議論の弱点を突破する)」などに代表される誤答例は37も現れた。解答に示されているように、項目17の理解にあたっては、被験者は「突く」という部分の漢字に大きな影響を受け、誤答をしてしまったのであろう。また、項目27については、「想从事美食工作(うまい食べ物に関する仕事をしたい)」、「想品尝美味(うまい食べ物を味わってみたい)」などのような誤答が6つ出た一方、「想要一份美差(楽しくて役得のある仕事が欲しい)」、「想要一份美好的工作(いい仕事が欲しい)」などのような正答も7つあった。即ち、被験者は項目27の「美味しい」という部分の漢字からマイナス影響とプラス影響の両方を受けていた。このように、母語の言語知識はメタファー表現の理解を促進する一方、場合により学習者を間違ったほうに導くこともあることが示唆されている。そのため、母語知識を利用する際は、日本語の語形や意味とよく比較したうえで、慎重にする必要があると思われる。

最後に、項目22「その女はまだ売れ残っています」の解答が特に興味深い。「売れ残って」の中の「残る」の意味に影響され、「那个女的卖的东西还剩着(その女が売っているものはまだ残っている)」、「那个女的仍旧在卖剩下的东西(その女はまだ残っているものを売っている)」のような誤答が多かった反面、「剩女(残されている女)」という単語を用いた「那个人现在还是剩女(その人はまだ残されている女だ)」や「那个女的是剩女(その女は残されている女だ)」に代表される正答も9つ出た。「剩女」は「結婚適齢期を過ぎててもまだ結婚できていない女性」を意味し、中国教育部が2007年に公表した新語であり、中国で、特にインターネットで流行っている話題である¹⁴。現在では、「剩女」の問題は既に軽視できない社会問題となり、一種の文化だとも言えるようになってきた。被験者は中国の「剩女」の文化に影響され、項目22の意味を理解していた。このように、母語に基づく文化知識は適切に生かされれば、日本語メタファー表現の理解に貢献できることが示唆されている。

5. 6 まとめ及び日本語教育への提言

以上、母語とメタファー基盤に関わる概念・言語の知識、認知様式の知識及び文化知識などの要素と日本語メタファー表現の理解との関連性について考察してきた。結論としては、次の2点に集約することができる。

- ① 母語に基づく概念・言語の知識とメタファー基盤に関わる認知様式の知識の両方は、中国人日本語学習者の日本語メタファー表現の理解に多くの影響を及ぼす要素であり、中でも、特に概念・言語の知識のほうが非常に影響力が強い。
- ② 中国人日本語学習者にとって、日中両言語間で概念的・言語的に共有される日本語メタファー表現と、換喩基盤のメタファーに基づく日本語メタファー表現のほうは比較的理解されやすいのに対し、言語的に非共有の日本語メタファー表現と、隠喩基盤のメタファーに基づく日本語メタファー表現のほうは比較的理解されにくい。

また、次の4つの示唆も得られた。

- ① 母語に基づく概念メタファーの知識は日本語メタファー表現の理解において重要な役割を果たしているが、それは教師からの指導がなければ活用されにくいであろう。
- ② 母語に基づく言語知識の利用は日本語メタファー表現の理解に大いに寄与できるが、それは功罪両

面があり、日本語の語形や意味とよく比較したうえででの活用が望まれる。

- ③ 文化性が薄い日本語メタファー表現に比べ、文化性が濃い日本語メタファー表現のほうが比較的理理解されにくいだろう。
- ④ 母語に基づく文化知識は適切に生かされれば、日本語メタファー表現の理解に貢献できる。

これらの結論と示唆に基づき、今後の日本語教育における学習者のメタファー表現理解力養成に関して、特に以下の2点を提言したい。

- ① 日中両言語間で言語的に非共有の日本語メタファー表現や、隠喩基盤のメタファーに基づく日本語メタファー表現に対する理解を重要視すること
- ② 教師からの更なる指導を通して、学習者に日本語と比べさせながら母語に基づく概念・言語の知識及び文化知識を最大限に活用させること

6. 終わりに

日常言語にはメタファー表現が浸透している。これらのメタファー表現の理解には様々な要因が関わっている。本研究では、中国人日本語学習者のメタファー表現理解力の養成に寄与するための研究として、独自のメタファー表現理解テストを作成し、日本語を専攻している3年生を対象にそれを実施した。その後、テストの結果によって日本語メタファー表現の理解に影響をもたらす要因について調べた。母語とメタファー基盤に関わる概念・言語の知識と認知様式の知識の両方が日本語メタファー表現の理解に影響する要因であることや、日中両言語間で言語的に非共有の日本語メタファー表現と、隠喩基盤のメタファーに基づく日本語メタファー表現が相対的に理解されにくいことなどを結論として得た。それと同時に、メタファー表現の理解における文化知識の側面の影響に関する分析、及びテスト項目の具体的な解答に対する質的な分析によっていくつかの示唆も得た。最後に、主な結論と示唆に基づいて日本語学習者のメタファー表現理解力養成に関する提言を試みた。本研究の不足点としては、メタファー表現理解テストの作成に用いた日本語メタファー表現の文脈の長短や語の難易度の統制について考慮が足りなかったことがある。また、本研究ではメタファー表現理解における文化知識の影響について分析してみたが、その影響を明らかにしていない。今後、メタファー表現の文脈の長短や語の難易度、及び文化知識などの側面からのメタファー表現理解への

影響に関して更なる考察が必要であると考えられる。また、メタファー表現の理解に関わる様々な知識の活用方法についての研究や、教室での授業を通して日本語学習者のメタファー表現理解力を養成する実証研究なども望まれる。更に、研究の幅を広げ、メタファー表現理解力だけでなく、メタファー表現の識別力や産出力、ひいては日本語学習者の総合的なMCの養成に関する考察も必要ではないかと考えられる。

注

- ¹ 応用認知言語学的アプローチは英語教育において始められたが、現在では日本語教育の分野でも提唱されつつある(森山 2007、荒川・森山 2009、池上・守屋 2009など)。
- ² 日本語訳は渡部・楠瀬・下谷(訳)(1986: 6)による。原文は次のとおりである。“The essence of metaphor is understanding and experiencing one kind of thing in terms of another.”(Lakoff & Johnson 1980: 5)
- ³ このメタファーは筆者がまとめたものである。
- ⁴ 鍋島(2011: 111-113)では、カテゴリーがメタファー基盤となるケースにも触れているが、カテゴリー性基盤は構造的基盤に還元できると説明している。
- ⁵ ここで言う換喩とは何らかの隣接性を持つ2つの事物の一方を用いて他方を指示する認知様式を指し、隠喩とは何らかの類似性を持つ2つの事物の一方を用いて他方を理解・経験する認知様式を言う(舛山 2010: 35-52)。
- ⁶ 日本語訳は筆者による。原文は次のとおりである。“a set of shared understandings that characterize smaller or larger groups of people.” Kövecses(2005: 1)
- ⁷ 他には、Kövecses(2000)や谷口(2003)なども概念メタファーと文化の関係について触れている。
- ⁸ 詳細はKövecses(2005: 259-264)を参照。
- ⁹ 日本語訳は筆者による。原文は次のとおりである。「隠喩の产生和使用是自然语言的常见现象。对隐喻能力的掌握已成为第二语言教学中不可缺少的环节。」
- ¹⁰ 『日本語のメタファー』(鍋島 2011)、「『理解』のメタファー—認知言語学的分析—」(鍋島 2004)など。
- ¹¹ 『明鏡国語辞典』(北原編 2002)など。
- ¹² 括弧内の日本語訳は直訳である。以下同じ。
- ¹³ ここで言う「濃文化性」と「薄文化性」のグループは、あくまでも日中両言語のみを考慮に入れる際の分け方で、中国人日本語学習者を分析対象とする場合に限る分け方である。他の言語も考えれば、事情が大分異なってくる可能性がある。
- ¹⁴ この説明は以下のHPを参考にした。
<<http://baike.baidu.com/view/404328.htm>>

参考文献

- 東眞須美. (2006). メタフォリカル・コンピテンス(MC)の測定—MCと言語能力との相関性—. 日本認知言語学会論文集, 6, 224-234.
- 荒川洋平・森山新. (2009). 日本語教師のための応用認知言語学. 凡人社.
- 池上嘉彦・守屋三千代. (2009). 自然な日本語を教えるために—認知言語学を踏まえて—. ひつじ書房.
- 王寅・李弘. (2004). 語言能力、交際能力、隱喩能力「三合一」教学觀. 四川外語學院學報, 20(6), 140-143.
- 北原保雄(編). (2002). 明鏡國語辭典. 大修館書店.
- 胡壯麟. (2004). 認知隱喩學. 北京大學出版社.
- 鐘勇. (2012a). 日本語學習者の概念的流暢性(CF)の發達に関する考察—メタフォリカル・コンピテンスに注目して—. 日本學研究, 22, 172-184.
- 鐘勇. (2012b). 關於日語專業高年級學習者隱喩能力發展現狀的考察. 日語學習與研究, 6, 106-112.
- 鐘勇・井上奈良彦. (2012). メタフォリカル・コンピテンス(MC)研究の現狀と問題点及び日本語教育への導入. 言語文化論究, 28, 73-86.
- 谷口一美. (2003). 認知意味論の新展開—メタファーとメトニミー—. 研究社.
- 張明傑. (2011). 隱喩能力培養在大学英语教學中的作用. 河北理工大學學報(社會科學版), 12(5), 168-170.
- 鍋島弘治朗. (2004). 理解のメタファー—認知言語學的分析—. 大阪大學言語文化學, 13, 99-116.
- 鍋島弘治朗. (2011). 日本語のメタファー. くろしお出版.
- 初山洋介. (2010). 認知言語學入門. 研究社.
- 森山新. (2007). グローバル時代に求められる総合的日本語教育と認知言語學. お茶の水女子大學比較日本學研究センター研究年報, 3, 111-117.
- 游曉玲. (2009). 隱喩能力、概念流利和語言學習. 江蘇外語教學研究, 1, 44-47.
- Azuma, M. (2005). *Metaphorical Competence in an EFL Context: The mental lexicon and metaphorical competence of Japanese EFL students*. Tokyo: Toshindo Publishing.
- Azuma, M. (2009). Positive and Negative Effects of Mother-tongue Knowledge on the Interpretation of Figurative Expressions. *Papers in Linguistic Science*, 15, 165-192.
- Azuma, M. (2011). The Influence of Mother-tongue Knowledge on Figurative/Metaphorical Interpretation. *JABAET Journal*, 14/15, 5-37.
- Charteris-Black, J. (2003). Speaking with forked tongue: A comparative study of metaphor and metonymy in English and Malay phraseology. *Metaphor and Symbol*, 18(4), 289-310.
- Danesi, M. (1992). Metaphorical competence in second language acquisition and second language teaching: The neglected dimension. In Alatis, James E. (Eds.), *Language Communication and Social Meaning* (pp. 489-500). Washington DC: Georgetown University Round Table on Language and Linguistics.
- Danesi, M. (1995). Learning and teaching languages: The role of conceptual fluency. *International Journal of Applied Linguistics*, 5, 3-20.
- Danesi, M., & Mollica, A. (1998). Conceptual fluency theory for second language teaching. *Mosaic*, 5(2), 1-12.
- Hashemian, M., & Nezhad, M. R. T. (2006). The development of conceptual fluency & metaphorical competence in L2 learners. *Linguistic Online*, 30(1), 41-56.
- Johnson, M. (1987). *The Body in the Mind: The Bodily Basis of Meaning, Imagination, and Reason*. Chicago and London: University of Chicago Press.
- Keckes, I., & Papp, T. (2000a). *Foreign language and mother tongue*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Keckes, I., & Papp, T. (2000b). Metaphorical Competence in Trilingual Language Production. In J. Cenoz & U. Jessner (Eds.), *Acquisition of English as a Third Language* (pp. 99-120). Clevedon: Multilingual Matters.
- Kövecses, Z. (2000). *Metaphor and Emotion: Language, Culture, and Body in Human Feeling*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kövecses, Z. (2005). *Metaphor in Culture: Universality and Variation*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lakoff, G. (1987). *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal About the Mind*. Chicago and London: University of Chicago Press.
- Lakoff, G. (1993). The contemporary theory of metaphor. In A. Ortony (Ed.), *Metaphor and Thought* (pp. 202-251). Cambridge: Cambridge University Press.
- Lakoff, G., & Johnson, M. (1980). *Metaphors We Live By*. Chicago and London: University of Chicago Press. (渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸(訳). (1986).

レトリックと人生. 大修館書店.)

Lakoff, G., & Johnson, M. (1999). *Philosophy in the Flesh: The Embodied Mind and Its Challenge to Western Thought*. New York: Basic Books.

Littlemore, J. (2001a). Metaphoric competence: A language learning strength of students with a holistic cognitive style. *TESOL Quarterly*, 35, 459-491.

Littlemore, J. (2001b). Metaphoric intelligence and foreign language learning. *Humanizing Language Teaching*, 3 (2), <http://www.hltmag.co.uk/>

mar01/mart1.htm.

Littlemore, J., & Low, G. (2006). Metaphoric competence, second language learning, and communicative language ability. *Applied Linguistics*, 27 (2), 268-294.

Low, G. D. (1988). On teaching metaphor. *Applied Linguistic*, 9, 125-147.

Russo, G. A. (1997). *A Conceptual Fluency Framework for the Teaching of Italian as a Second Language*. Unpublished doctoral dissertation, University of Toronto.

付録1 得られた日本語メタファー表現の内訳

	a. 概念的・言語的に共有	b. 概念的にのみ共有	c. 概念的・言語的に非共有
1. 共起性基盤のメタファー	関連性は連結	彼とはもう連絡を断った	彼はあの事件に繋がっている
	理解はつかむこと	文章の大意をつかむ	さっき言ったことを悪く取らないでください
	親密度は近さ	2人の関係が近づいている	
	楽しい状態は上、悲しい状態は下		それを聞いてみんな落ち込んでいる
	地位が高いことは上、地位が低いことは下	これは上からの命令だ	他人を下に見る
	怒りは容器の中の熱い液体		それを知った時、彼は頭から湯気を立てた、胸が煮える
	完了は上、完了前は下		明日までにこの仕事を上げましょうか、それは下書きだ
2. 構造的基盤のメタファー	考えは食物	学習内容を消化できない	その学生は飲み込みが早い
	人生は旅	人生の十字路に立つ	無軌道な若者
	議論は戦争	これは相手を攻撃する論点だ	議論の弱点を突く
	言語情報は水		噂を流す
	理論は建築物	この理論を支える事実はない	
	結婚は売買		その女はまだ売れ残っています、娘が去年片付いた
	人生は野球試合		私は首相の続投に疑問がある、滑り込みセーフで宿題を終わらせた
3. 評価性基盤のメタファー	楽しい状態は明るい状態、悲しい状態は暗い状態	気持ちが明るくなった	何があっても、暗くならないよ
	善は直、悪は曲	真っ直ぐな人	曲がったことが大嫌いだ
	善は白、悪は黒		彼は絶対黒だ
	善はきれい、悪は汚い	心が汚い	
	良いことは上、悪いことは下	生活水準が高い国	数学では彼の上に行く
	簡単なことは甘いこと		この仕事を甘く見ないでください
	良いことはうまいこと、悪いことはまずいこと		美味しい仕事欲しい、彼との関係がまずくなった、何かうまいことはありませんか

注: 下線の箇所は重点的に考察するメタファー的な部分を示している。

付録2 メタファー表現理解テスト

日语隐喻表现理解小测试

一. 请把下列各题中的日语短语或句子翻译成中文。

1. 彼はあの事件に繋がっている

2. さっき言ったことを悪く取らないでください

3. 二人の関係が近づいている

4. 明日までにこの仕事を上げましょうか

5. 彼とはもう連絡を断った

6. それを聞いてみんな落ち込んでいる

7. これは上からの命令だ

8. それを知った時、彼は頭から湯気を立てた

9. 文章の大意をつかむ

10. 胸が煮える

11. 他人を下に見る

12. それは下書きだ

13. 学習内容を消化できない

14. 無軌道な若者

15. 娘が去年片付いた

16. 人生の十字路に立つ

17. 議論の弱点を突く

18. 私は首相の続投に疑問がある

19. 噂を流す

20. この理論を支える事実はない

21. その学生は飲み込みが早い

22. その女はまだ売れ残っています

23. これは相手を攻撃する論点だ

24. 滑り込みセーフで宿題を終わらせた

25. 何があっても、暗くなってはいけないよ

26. 真っ直ぐな人

27. 美味しい仕事が欲しい

28. 心が汚い

29. 曲がったことが大嫌いだ

30. 数学では彼の上に行く

31. この仕事を甘く見ないでください

32. 彼との関係がまずくなった

33. 生活水準が高い国

34. 彼は絶対黒だ

35. 気持ちが明るくなった

36. 何かうまいことはありませんか

Factors Influencing Chinese-speaking Japanese Language Learners' Comprehension of Metaphorical Expressions: Focusing on the Knowledge Related to Mother Tongue and the Basis of Metaphor

Yong ZHONG

Abstract:

Along with the development of Conceptual Metaphor Theory and Applied Cognitive Linguistics, the Metaphorical Competence of foreign language learners has been considered more and more important, and it has now become an indispensable segment of second language acquisition. In the field of teaching/learning English and some other languages, much progress has been made with the research on Metaphorical Competence of learners. However, only a few studies have been done in the field of Japanese language education in China and Japan. In this paper, in order to contribute to the cultivation of the Chinese-speaking Japanese language learners' ability to comprehend metaphorical expressions, an original test on the comprehension of Japanese metaphorical expressions was designed first, and then it was used to investigate the factors which influence Chinese-speaking Japanese learners' comprehension of metaphorical expressions. The results mainly showed 2 points: (1) Both the knowledge related to the mother tongue and the basis of metaphor are important factors that influence Chinese-speaking Japanese language learners' comprehension of Japanese metaphorical expressions. (2) For Chinese-speaking Japanese language learners, the Japanese metaphorical expressions that don't share similar linguistic forms with Chinese and the ones that are based on metaphors having a metaphorical basis are relatively difficult to understand. In contrast, the Japanese metaphorical expressions that share similar conceptual metaphors and linguistic forms with Chinese and the ones that are based on metaphors having a metonymic basis are relatively easy to understand. Finally, some proposals on the cultivation of the ability to comprehend metaphorical expressions of Chinese-speaking Japanese language learners were presented, basing on the main conclusions and implications of this paper.